有度丘陵と礫層の変形構造

北村 晃寿*・浅田 恵里**

Deformational structure in gravelly delta deposits in the late Pleistocene Kunosan Formation

Akihisa Kitamura* and Eri Asada**

写真1 礫層の変形構造の露頭写真。巨大地震による流動化起源か？

日本坂トンネルを抜けて静岡平野に入ると、進行方向の右手に小高い山が見える（写真3）。山は

「へ」を裏から見たような形で、海側に急に傾き、陸側に向かって緩く傾く。この山が有度丘陵で、陸側の緩斜面が日本平、海側の急斜面は石垣イチゴの産地である。日本平は最終間氷期の堆積面で、それが隆起・傾動し現在300mの高度にまで達している。

有度丘陵を構成する地層の一つ久能山層は、層厚100mに達する礫質ファンデルタの堆積物である。この久能山層の前置部の堆積物中に礫層の変形構造

* 静岡大学理学部生物地球環境科学科
Institute of Geosciences, Shizuoka University, 836, Oya,
Shizuoka 422-8529, Japan

** 東京大学大学院理学研究科
Geological Institute, University of Tokyo, 7-3-1, Hongo,
Tokyo 113-0033, Japan

を発見した（写真1）。ハンマーの右側にある礫脈（？）は上方に向かって北に30°傾き、幅50cm、高さ130cmで、上に開いた形状を呈する。礫脈（？）内の礫は互いに接し、礫のサイズや配列には上下方向への変化はないが、側方へは明瞭に変化する。す

なわち、礫脈（？）の中央部には中礫や大礫があり、そこから両側へ向かって礫径が急激に減少する（写真2）。ハンマーの左側にも中礫からなる礫脈（？）が見られる（写真1）。このような変形構造が形成された機構を現在検討中である。

写真2 礫脈（？）。礫脈（？）中央部の礫で最も重い礫は1.4kgに達する。

写真3 西側から見た有度丘陵。